



普及版

吉川英治代表作品

祇園精舎の鐘の聲

諸行無常の響あり

父と子が、兄と弟が血を血で洗
う源平興亡の悲曲。

吉川国民文学が「平和」という
人々の永遠の願いをこめて描き
あげる壮大な人間ドラマ！

吉川英治

新平家物語

九



新、平家物語

六興出版

新・平家物語 9 巻 (全12巻) 0093-00509-9216

昭和46年8月25日 初版発行

昭和58年11月20日 第10刷発行

著者 吉川英治

発行者 賀来寿一

発行所 株式会社 六興出版

東京都文京区水道2-9-2 〒112

電話東京(943)3431 振替東京 1-92448

印刷 多田印刷株式会社

製本 株式会社明泉堂

落丁本、乱丁本はお取替えいたします

©1973 Fumiko Yoshikawa, Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

第9巻 目次

〈千手の巻(続)〉

小磯大磯(5)——新柳営(8)——石の庭(15)——千手ノ前(20)——酒景雨景
(25)——楚歌と虞の君(29)——初夜ならぬ初夜(36)——夜伽吟味(41)——空
抱きの君(46)——絵像と大姫(51)——興の通い日(57)——返り帰りの大納言
(61)——裂かるる生木(65)——怨敵受取(68)——ゆかりの人びと(71)——般
若寺斬り(75)——叙勲(81)——跛の公卿(85)——一日任官(89)——駒化粧
(91)——おだまきの歌(96)——得意と失意(102)——押しつけ妻(106)——鼓の
家(108)——鳴らない鼓(113)——正妻(117)——よくまわる舌(121)——初霜(125)
——ひとまず無事(129)——政子と幕府(131)——雪中双艶(135)

〈やしまの巻〉

熊野の海党(143)——鮫女のふるさと(148)——買い占め(152)——田辺の鯨(156)
——小王国(158)——さくらノ局(162)——引き綱(165)——はだか密談(169)——

路傍の修験者(172)——神文(176)——紅白鶏合わせ(179)——策と策(183)——呉
越の会(190)——肉迫(195)——歡喜天(200)——船のない漁夫(206)——船集い
(210)——那須の兄弟(214)——先驅の人びと(220)——第一語(224)——非奇跡
(230)——死中・滑稽あり(235)——春眠(241)——草の実仕事(243)——大坂越え
(247)——野馬隊(251)——やしま世帯(255)——神ならぬ身(259)——孤父(264)
——てんぐるま(267)——女院のおん肌(271)——群蝶おののく(275)——虚相実
相(280)——総門落とし(286)——平大納言の和策(291)——荒公達(297)——異端
の道(302)——二日待ち(308)

千
手
の
巻
(続)

小磯大磯

「何せい、平家の公達を生捕つて、東國へひき下したのは、こんどが初めてのこと、いわば鎌倉開府以来の出来事ぞ、と仰せられてな、君にもなかなか御慎重なのだ」

頼朝の旨をうけて来た北条時政は、こう告げて、

「——で、さっそく、鎌倉殿には奥伊豆の狩場からお歸りに相成るが、囚人の中將どのは、もちろんじきじきに御糾問のお考えらしい。二十八日、當中において、諸臣とともに御覽あらん、との仰せだが……。どうである、間に合うかの」

と、梶原との打合わせにかかった。

「まにあいましようにとも。きようは二十四日、その日までには」

景時がいう口を取つて、時政は、なお、

「いや、いや。三島から御府内まで、ただ参るというだけのことならば、むしろ日取りは充分だが、鎌倉殿のお心では、このさい、沿道の諸民にたいし、源氏が今、西国において、かくの如く勝ちつつあるぞという事実を、眼に見せんと思召しておられる」

「その儀は、かねがね、おふくみもあつてのこととうけたまわり、海道こままでの道中も、わざと、日取りをかけて下つて参つたわけですが」

「さらに、足柄から先は、中將どのを淨衣に着かえさせ、手鎖をかけ、檻車に乗せて鎌倉へ入るべしとおさたでもある」

「ただの囚人同様に」

「さ、そこがむずかしい。余りに酷く見えては、かえつて、諸民の眼に哀れを催し、鎌倉殿を非情のお人と思うであらう。——酷からず、そして、きびしく」

「では、扱いは、これまで通りでよいわけですね」

「むしろ鄭重に、有るかのごとくして、しかも、威を示して、沿道の民に見せよとの御意だ」

「心得ました。ただ一つの難事は、手鎖をかけるのを、中將どのが、御承知あるや否や、ちと懸念ですが」

「なんの、捕虜の大將に、否やを申す資格があらう。たとえ荒縄にかけられても文句はないはず。さるを、故入道清盛どのの五男なればと、ひそかには、お宥りあつての御処置だ。よく論じてあげるがよい」

「いや、さまでのわがままはいわせませぬ。着府の日取りも相違なく運びますれば、君前、よしなに御上聞を」と、梶原はさいごに、もう一度、頭をさげた。

洛内や戦場では、さかんに軍監かぜを吹かせて、出先の諸將に煙たがられていたかれだが、ここでは、その権柄面の片鱗も見ることができない。

梶原にも、やはりにが手はあるものとみえる。鎌倉殿と仰がれる頼朝にさえ、御台所の政子というこわいような存在がある。

その政子夫人の実父がこの北条時政だ。つねに表に立たず、頼朝夫妻の「陰」にはなっているが、陰の力と作用を、梶原は見のがしていないし、事実また、政治的な手腕にしても、線の太さや、老獪さにかけても、時政の方が、年齢もすこしうえだし、役者もうえであることを、かれとしても認めないわけにゆかなかった。

『では、いずれまた、鎌倉表にてお目にかかろう、旅路も、あとわずか、せつかく、お役儀を完うなさるように』

用談がすむと、時政は、北条へ帰って行った。

翌日、梶原の一行は、足柄山へかかっていた。山中の行路では、重衡の中將も、まだ、馬の背のままだった。

やがて酒匂川をこえ、これから先、鎌倉までは、坦坦たる駅路ばかりとなった門立ちの朝である。

梶原は、重衡の前へ出て、

『長の旅路、かつは、きのうの足柄越えなど、さだめし馬にもお疲れでおわそう。きょうよりは、牛車をお乗物に当

て申す。また御着衣も垢にお汚れの御様子、お召しかえあ
るがよい』

と、用意の淨衣をそこにおかせた。

それは、無色無文の真白な囚衣である。

重衡は、だまってうなずいた。しずかな眸をそれへ注ぎながら「——鎌倉の府も近づいたそうな」と、ひそかに思
うらしい容子であった。

わざわざ都からひいて来た網代の牛車。轎車と呼ぶのは
それであった。

むろん、四方の簾は高く巻かれ、風も吹き通しだし、中
の人も見通しである。

宿の軒端から、うながされて、重衡はそれへ乗った。

座には、新しい素むしろが敷いてある。

かれが、それへすわるとすぐ、車の左右から武者たちが
寄りたかつて、かれの両の手くびへ鎖の輪をはめた。鎖の
長さだけは手も使えるようにはなっている。

『……………』

重衡は、その縛めにも、無言だった。

——もし拒んだら。

と、眼ざしを研いでいた景時も、意外な顔したほどだっ

た。

両の手くびを委せ、少しも悪びれるふうはない。静かな人柄そのものにそれは見えた。

ほどなく武者たちが車のそばを離れると、重衡は、思い深げに、わが手を、じいっと凝視していた。観念とか、ただの覚悟とは、およそ違うものに見えた。「——これもまた、平家の罪障消滅の一つになるならば」と、歎びでさえあるかのような喜色とほの紅い羞恥の様を、耳の根から頬へみながらしたのであった。

檻車は、騎馬を先頭とし、大勢の軍兵に追つ立てられて、相模ノ国府ノ津を通つた。

道も狭いばかりな人立ちである。群集の影より高く網代車の蓋が揺れてゆき、特に、重衡の白直垂に折烏帽子の、白と黒とが、しみ入るように、人びとの眸に残つた。

町を離れて、並木や野辺を行つても、まだ路傍に見物は絶えなかった。そして、例外なく、かれらは「あれが大仏殿を焼いた平家の大將軍か」「強悪な平相国の息子のひとりか」と、疑うような顔を並べていた。東国の地へはいればはいるほど、平家とは暴悪な人種の代名詞かのごとく覚えさせられて来た人びとの先入観がつよかつた。その土民の眼が、じつさいの平家人を間近に見て、意外に思つたらしいのである。

道はまた、のたりのたりの春の海を、右にしてゆく。

小磯や大磯ノ宿では、たくさんな遊女たちが、見物の中に立ち交じつていた。

鎌倉の繁盛以来、片瀬からこの辺の宿宿には、にわかにな、こうした女たちの脂粉が町屋の色めきを急にしていった。小磯の鶴ノ君とか、大磯の虎、こゆるぎの小菩薩などという妓名は、鎌倉武士の若い仲間では大きな魅力となつていっている。

それはともかく、路傍に立ったかの女らもまた、かねて酒席のうわさに聞いていた重衡を「どんな恐らしき男か」と、想像していたのが、車の上には、真白な直垂を着た年も三十年ほどな貴公子を見たので、「まあ、好い男——」と、男振りの品さだめに、喋喋と袖引きおうて、いつまでも、檻車の影を見送つていた。

西の空に、富士があった。松原越しの白妙を、車上の人の白直垂が、ときどき、ながめ入つていた。——が、やがて夕雲の赤富士と変つてきたころ、梶原の同勢は、腰越ノ宿にはいつていた。そこでは車を停め、馬を下り、警固はみな、腰兵糧を解きはじめた。

——その間に。

梶原は使を府内へ駆けさせて、

「このまま、夜にかけて、鎌倉入りをいたすべきや、また

は、明朝を待つて、御府内に参すべきや」

と、すでに先着しているはずの北条時政へ、さしずを仰いだ。

あすはすでに、頼朝が引見の日であつた。——時政からは、ただちに、

『夜に入るも仔細なし。こよい、中将どのをば、御辺の自邸に休息させおき、朝には、沐浴をゆるし、新たな衣服を給し、すべて、囚人扱いなど廢して、寛大なる待遇を与えて罷れとの御意である。——そして、御引見の儀は、明朝日ノ刻（午前十時）諸臣列座の上にて行なわるるゆえ、時刻相違なく、参入あるように』との返辭があつた。

晩の腹支度をすました梶原以下、護送の将士は、ふたたび馬に乗り、さかんなる松明を点しつらねて、夜おそく、鎌倉の町へはいつた。さすが、頼朝のいる鎌倉の府、物見高さは、海道（かいどう）の宿宿（しゆくしゆく）の比ではない。雑闇（ぞくあん）は、赤い火光と人の渦（うず）で沸き返り、檻車（がらんしや）をひく牛の歩みさえ辻つじでは行きつかえるほどであつた。

新柳營

鎌倉の柳營も、足かけ四年、ようやくその大規模な土木の工事は、ほぼ完成を見せかけている。

が、なお一部には、間注所（まんとしよ）や公文所（くぶんしよ）などの、新たな普請（ふしん）にかかつており、石垣（いしがき）の石肌（いしはだ）にも、路面（ろめい）の土にも、まだ苔（こけ）さびた趣きはどこにもない。

殿廊（てんだう）の材は白木のままだし、高欄（たからん）の金具もびかびかしていて、すべてが、眼に痛いほど真新しかった。霸氣（はき）と勃興（ぼつこう）の象徴（しやうてい）ではあつたが、深さ、ゆかしさ、風雅（ふうが）な風はないのである。柱（はしら）、棟木（むねぎ）、大屋根（おほやぐ）の曲線（まがじ）までが、都風（みやぎ）をきらつて、すべて独得（どとく）な武家（ぶけ）様式（やうしき）の豪壯（ごうさう）をあらわしており、すでに「鎌倉建築（かまくらけんちく）」の好み（このみ）をここに兆（しる）していた。

——日ノ刻、少し前。

重衡（じゆうかう）は車を降りて、この新しい建築群（けんちくぐん）を、眼（め）の前にし、つらなる大屋根（おほやぐ）を宙（そら）にながめた。

しかし、重衡（じゆうかう）の面（おもて）には、何（なに）の感興（かんきよう）もわいていない。ただ、威（い）を誇示（こかし）してやまぬどぎつい武家（ぶけ）趣味（しゆみ）を押しつけられる気がただけ（ただけ）のようである。

元来（もとより）、かれは殿上（てんじやう）の人（ひと）だ。

いわゆる大宮人ではないが、生まれながら平安朝文化の中に育まれてきた純粹な都人にはちがいない。

『……なるほど。これが、聞こえた關東の府か』

口にこそ出さないが、かれの朱唇に冷笑の影がなくなない。「成上がり者の好み」と見たのかもしれない。

梶原景時は、この日、かれのさきに立つて、総門をはいり、中門も通つて、

『こなたへ』

と、おごそかに、みちびいていた。

景時の、しゃちこ張った肩や、容態ぶった歩み方など後ろから見てゆくと、あたりの物の真新しさも、ここの建築様式も、さまで気にはならないのである。かえつて、ふさわしくも見えるのだった。

真白な敷砂の上を、かれについて歩むことおよそ百歩、幅十二尺ほどの階につき当った。

上を見ると。

左右の廻廊に添つて、数十名の外侍が居流れている。

また一段高い内側には、頼朝の近衆や内侍の面が見え、さらに両袖の席には、大名たちが、所せましと、つめあつていた。

重衡は、梶原の顔を、かえりみて、

『よいのか』

と、ことは短くいった。

そして、階へ足を踏みかけながら、もう一度、念を押すように、

『ここを上がつてもよいのだな』

『どうぞ』

梶原もつづいて、かれに添つて、階を昇った。

正面に、上段の間があつた。

頼朝の座らしいが、御簾が下がっている。

その大床を七、八尺ほど退がった所に、一枚の円座（わら編の敷物）がおいてあり、重衡は「——それへ」と、着座をすすめられた。

神妙に、かれは、すわった。

視線の陣に囲まれたかたちである。大名以下、外侍まで、百人ちかい鎌倉直参たちのまん中におかれたのだ。凝視、冷視、憎視、蔑視、一つ一つの眼ざしが、重衡の姿を射た。

重衡は、動じる色もなかった。かれの眼は、人なき御簾へ向いていた。しかし胸には、やがて現われるであろう頼朝の姿でもない、べつな人間の像がふと描かれていた。その人は、都で会つた法然であつた。かれはなぜか法然を思い出していたのである。法然のいったさまざまなことばを思い起しているうちに、やがて想いは声なき念仏となつ

で、かれの心は人知れず春の陽のようにほかほか温められていた。

——はるか、奥まった方で、かすかに、鈴の音がしたようだった。何で鳴った鈴か、重衡にはわからない。

出座は、なかなか手間どった。

『はて、もののしさよ』

と、重衡はすこし、おかしく思った。

伝統のないところに、しいて容儀や威厳をもとうとする武家心理がわかる気がする。

やや退屈を覚えて来たのだろう、列座の面も、そろそろ身じろぎしたり咳声せきこゑをもらして、おおかた眸を散らしはじめた。

重衡もしずかな眼で、満座をずっと見渡していた。すると、かれの視線にゆき当った幾つかの顔が、あわてて眼をそらしたり、面をあからめた。

——見た顔よ。

と、重衡は苦笑を覚えた。

はつきりと、重衡の記憶にあったのも道理だった。それらの顔は、かつては、平家に従属していた者共なのだ。六波羅や西八条の門に駒をつなぎ、重衡が東大寺の大仏殿を取り囲んだ時、部下として加わっていた武者すらこの座にいたのである。

はしなくも、重衡は、今を生きるむずかしさと、世転の縮図をここに見た。けれど、そうした人びとをも、かれは憎む気にも咎める気持にもなれなかった。ただかれらの方でみな、いい合わせたようにみずから恥じるかのような色をどきまぎさせただけだった。

『叱……。御出座になられます』

どこかで、警蹕けいそくの音がした。

一瞬、水を打ったようになり、群臣すべて、頭を下げた。

——と、ひとりの法師姿の家臣が、脇座からすべり出て、正面の御簾みすずりをするすると巻いた。

頼朝は、錦の縁をとった上置あげだてのうえに、大口おおくち（はかま）の両ひざを大きくあぐらに組んで、ゆったりとすわっていた。

政子の好みか、かれも近ごろは洒落者めいた装いである。艶つやうるわしい洪塗しやぬりの立烏帽子に、浮文の直垂ひたれは藍地に銀が摺すりってある。

『……………』

五本骨の扇子を右手に持っていた。容儀は、さながら摂関家の当主のようである。けれど、その大形な容態が、おかしくないほど、かれ自身の人柄にも一種の魅力と厚みがあった。元来が、北条家の政子やら伊豆の女たちをさわが

せた美男でもあったが、年とともに、それに品位と重さが加えられてきたものであらう。

「……………」

いつまでも、頼朝は黙ったまま、見すましていた。

もちろん、重衡の姿を、である。

重衡もまた、一言も発しない。

それのみか、かれはまだ、頼朝にむかつて、拝をしていなかった。頼朝の眸は、相手の礼を催促していたのである。——が、重衡は、ただ毅然としていた。頼朝の眼に眼を返しているままの姿である。

「景時」

半開きの扇子が、やっと、うごいた。梶原の顔をさし招いたのである。

「……はっ」

「大儀だったの」

「おそれいまする」

「何よりは、大切な院よりのお預け人。みちみちにても、万一のお病氣などあつてはと、案じていたが」

「至極、おすこやかで、景時もまず、ほっと仕りました」

「途上、手鎖や囚衣などお強い申したが、あれも院の御内旨によること、頼朝の心ではない。……が、心ならずとい

えども、頼朝のしたこと。さだめし、お恨みでありつらん」

——こう梶原へいいながら、頼朝はまた、ちらと、重衡の方を見た。重衡の方から口をひらけとの誘いであらう。

初めて、重衡は素直に頭を下げてから、にこと笑った。が、それは頼朝の肚を読んでの、苦笑であつたかもわからない。

しかし頼朝は、その礼と微笑を見て、ようやく気色を直して、こう、ことばをかけ始めた。

「いやなに、重衡の殿、これへ参られたからには、以後の院議、いかがあるとも、御一身の末は、頼朝一存にあること、ここを敵国などと思されず、お心やすくおられたがよい」

「かたじけない御意」

重衡は、頼朝のなぐさめを、ことば通りに、うけ取ったかのごとく、

「身に恥はあれ、生きてあれば、思わぬ異郷の山河も見、はからざる人のおん情にも会ふものかな、と嘆じられます。しかしただ今、御一存と仰せられたことには、不服がある。かく虜囚の恥を忍んで生き長らえておるものの、も

ともと、重衡が生涯は、終わったにひとしいもの。一命はすでに天意にあること。院にそむいてまでの御斟酌には及び申さぬ」

と、何の感情にも左右されない、まろい声で答えた。

「天意。なるほど」

頼朝も、率直にうなずいて、

「まこと、仰せの通りではある。——思えばこの頼朝も、年十三のむかし、囚われて、平家の門へひかれ、池殿の家に預けられた。……あのおり、もし、雪の近江路にて、父義朝と迷ぐれなかつたら、落ちのびた先にて、父とともに非業の最期をとげていたかもしれぬ。いや、頼朝の今日は無かつたにちがいない。あの夜の大雪も、すなわち、天意というものか」

と、めずらしく、過去を詠嘆した。そして、また、

「人には運命のあることながら、昔日の少年のわれに、故入道殿（清盛）が懸けられた情はなかなか忘れぬ。入道殿が背かれずば、いかに、池ノ尾どののお口添えがあらうと、必定、打ち首になったであらうに、助けおかれしは、ひとえに入道殿の御恩。——頼朝、今とても、忘れはいたさぬ」

と、いった。

重衡は、そういう頼朝の顔を、まじろぎもせず、見まも

った。ほのかな血のいろが、重衡の面にもうごいたかに見える。胸底に封じられていた感情が、ついあふれたのかも知れなかつた。

「はて、思いがけぬことを承りました」

と、やや改まっていい出したことばの端にも、すこし皮肉な語気があった。

「——今日、この場所にて、鎌倉殿のお口から、そのような述懐を伺おうとは、重衡も思いもうけぬこととおざつた。——およそ平家を仇と恨み、平家を覆さんとなされし人は、むかしの佐殿、今の鎌倉殿と、だれ知らぬ者はない。その御仁の口から、故入道どのの恩は忘れぬと聞くは、大きなよろこびです。わけても、地下の浄海入道（清盛）こそ、その御一言にて、初めて、成仏なされしならん」

重衡は、はつきりと語尾をむすんだ。そしてなお頼朝の面から凝視を離さなかつた。

とはいえ、相手の忘恩を、いま、責めても始まらないと思う。身は、無力の虜囚である。物狂いと笑われるのがおちであらう。

だが、もし頼朝に、真実、いまの一言に違わぬ情誼があるならば、即座に、西国の合戦をやめることをここで誓わせたかつた。それこそが、生き恥を賭けて生き残っている

自分の使命の一つよ、とも思った。

——が、逆に、その考え方の甘さをみずから笑いたくなく、
る気持をどうしようもなかった。「頼朝が、そんな男か。
伊豆女をだましたのは、その口巧さではないか」と、べつ
な觀察が心のどこかで嘲るのだった。

突然、かれは、哄笑した。

「はははは。げにもお互いは凡夫と凡夫。話してみねば分
からぬものです。そういうお心の鎌倉殿とは、きょうま
で、つゆ知らなんだ。……いや、不明不明」

「これはまた……」

頼朝は、受け太刀気味な不快を、苦笑にまぎらして、

「ちと、御遠慮なき仰せではある。しかし面白い。人の移
り、世の流転ほど面白いものはない」

——して、青白む感情を抑えるかのようにしばらく口をと
じてしまった。が、やがて、きつと改まって。

「さきほど、あなたもいわれたが、源平両族の、こうなっ
たのも、いわば天意。自然の循環ではあるまいか。さしも
入道殿すら、天寿には克てず、みまかられた。平家御一門
に、あの神器を喪われたことこそ、かえすがえす惜しいこ
とであった。——もし入道殿がなお世におわせば、天下、
かかる紊れも見まいものを」

「みだれは、それ一事によるのであろうか」

「禍の因は、御一門の内にあったものと存する。——か
りに頼朝が、いかに野望を抱けばとて、もし、平家にし
て、院の補佐よろしく、六波羅の政道に正しくば、蛭ヶ
島の一野人に、何がきよう。頼朝を立たせたものは、だ
れでもない、平家そのものであったと思う」

「……………」

「故入道殿のわがまま、なされ方、乱暴の数かずは、まだ
しも、あの大量があつてのこと。したが、何の御苦勞も
知らぬ公達ばらが、なお、宇内の領国の半分を私に有
ち、悪政だけを、まねるにおいては、頼朝が立たずとも、
天下の怒りは当然でおざろう。——ただ、不幸なことに
は、木曾冠者めが、逸早く、都へ攻め入り、收拾もつかぬ
乱をよび起こして、院の宸機を悩まし奉り、平家御一門を
も、西海へ追うてしまったこと。——その事だけは、源氏
にとつても、悔まれる。——が、いまは都の家も世の信望
をも失うて、屋島とやらの逼塞し給う方がたに、頼朝、な
んでこれ以上の武力を加え申そうや。……時を見てともに
矛を収め、源平二氏、力を協わせて、四民和樂のよい世を
見たいとする願いこそ、まこと、頼朝の本心なのでござ
る。いかに重衡の殿、おん身にしても、それには、否やも
あるまいが」

雄弁である。

のみならず、理論は立っている。自分の旗あげは、決して野望ではないというのだ。野望の乱は、木曾義仲の所業であり、院を悩ませたのも、諸民を苦しめたのも、また平家を西海へ駆逐したのも、それは、義仲の暴と、平家自身が招いた当然な世の怒りであつたのである。

重衡は、黙って、頭を垂れた。

頼朝に対してではなく、事、平家の悪政にふれると、世の衆生にたいして、かれは一言もない悔悟に打たれる。そして、頼朝であれ、だれの声であれ、それを自分にむかつて責める声には、あの石つぶてや泥草鞋に身をさらした日のように、つつしんで、その辱と辛さに耐えねばならないと思うのだった。

『いや何、重衡の殿』

頼朝は、急に、居構えをゆるめて、

『お気に障られな。ついあなたの遠慮なさにつりこまれ、こなたも無遠慮を申してみたまでのこと。いずれ以後の方策などについて、重衡の殿のお考えもゆるりと伺いたいのだ。……が、昨夜は遅し、きょうはこの固苦しい列座の中、さだめし、お疲れもなお癒えてはおられまい。……景時』

と、ふたたび、梶原をよんで、

『御辺の役目は、きょうをもって、終わってよい。長途の

勤め、大儀であつた』
と、ねぎらつた。

『そしてすぐ、その眸を、右側の列座の中へ移して、
「狩野介、これへ」』

と、一つの顔を、さしまねいた。

伊豆の狩野の住人、狩野介光茂が、すぐ立って、簾前へ来て平伏した。

經ヶ島時代から、頼朝に心をよせて、早くから盟をむすんでいた直臣中の直臣で、四十がらみの、見るからに豪直らしい武者であつた。

『狩野介』

『は』

『きょうよりは、重衡の殿を、そちの館へお迎え申しあげよ』

『え。それがしに』

『ちと、荷は重かるうが、こよなき誉れと思うがよい。——最前も申せしごとく、大切なお客んなれど、院の教慮を察し奉るに、なお、平家へのお憎しみははなはだし、重衡の卿も、いわば仇の重なるひとり。依然、囚人たるの御勘気は解けておらぬ。その辺、よう心得得、外見はきびしく、内にては、朝夕のことにも、御不自由のないように、お仕え申せ』